兒童就學に對する母親の注意

ランバス女學院附屬幼稚園園醫　竹村一

初めて學校に行くといふ事は子としても親としても眞實悅ばしい心持のするものである。

社會的生活が幼稚園時代よりもよく廣くなり情意の敎育から理知の敎育に遊戲の時代より直觀の時代にと移つてゆく人生に於ける新しい記念にである。

◎一般發達　幼稚園生活の終る頃は身長が目立つてずん〳〵伸んでゐたものが今度は體重が增して大變丈夫な體格になるその時に學校生活が初まる乳齒が永久齒に變るのも此學校生活の前期である、頭蓋の發達も著しいし筋肉骨骼も兒童としての完成に移る時である。

◎死亡率と罹病率　元來人間の死亡率は乳兒の時が最多いそして最少ないのは小學校時代の後半期である就學始期はまだそんなに少ないといふ事は出來ない（五歲・十歲人口千に對する死亡率は五・六强）然し死亡といふ事よりも學校生活の兒童に對する罹病率といふ事が一層注意を要する事である、家庭生活又は少人數の幼稚園生活から何百何千といふ群集生活に移る爲に自然に種々な傳染病にかゝる機會が多い就中猩紅熱、百日咳、麻疹、實扶垤里等の樣なものである。

其他學校病と云はるゝ脊柱彎曲、近視眼、耳鼻咽喉の疾患にかゝる時期である。

殊に注意を要する事は結核病である、肺結核、結核性腦膜炎其他の結核病で死ぬる兒童は可成多いが夫よりも尙大切な事は兒童期の進むにつれて潛伏結核が多く證明せられて來るといふ事である。

◎課業に對する疲勞　群集生活授業本位の生活（幼稚園の樣な遊戲本位でなく）に加ふるに文字であるとか數であるとかいふ樣な恐ろしい程兒童には苦痛である新らしい課業につかねばならない從つて當然の結果としてそこに疲勞といふ事が起つて來る、私の調査からみましても就學始期には身體發育が前の時期からつゞいて佳良であるべき筈だのに身長體重

の增加は止り或は甚しい兒童になると體重の減少さへ來す者が可成多數にある。

之は勿論其兒童の遺傳素質にも因りますが然し一面に於て授業といふ事は兒童の健康に對して重大な影響のあるといふ事が判ります。

そこで親として兒童を入學せしむるについて種々と考へねばならぬ事があると思ひます。

(一)、兒童體重の動搖を注意する事　體重器を用ゐる事が出來れば此上もない事ですが無いとしても次第に瘦せて來るか如何かを充分に氣をつけねばなりません。

(二)、貧血が起りはせぬか　學校に行きかけて次第に顏色がわるくなつて來はしなかつたか何事もぐずぐずする樣に力ない勢のない態度になりはせなかつたか更に頭痛頭重を訴へはせぬか。

鼻血を出したりせぬか。

夜中に驚て飛び起きて泣いたりせぬか。

夜はよく睡眠をするか。

此樣な事は生活の變化による疲勞の結果である。

兒童就學の始期はつとめて急激な生活の變化を家庭に於て緩和してやる樣にする事は第一に考へておく事である。

勿論此疲勞に對しては適當な運動、充分なる睡眠(九時間乃至十時間)を取らしめ更に食物の調理に意を用ゐる事が大切である。

體重の減少や貧血の防止さては疲勞の恢復等に關しては食物は重大な意義のものである。

其外新鮮な空氣、溫暖い日光の必要な事は云ふまでありません親によるとやれ復習やれ復習と學校から歸ると夕方まで机の前に坐らして子より親の方が一生懸命になる方があるが私は唯每日學校から歸れば一度五六分間でも十分間でもよろしいから復習するといふ習慣をつけておきたいとのみ考へます。

殊に神經素質の兒童は一層の注意を以て此疲勞の起らぬ樣にせねば遂に再び歸らざるの悔を殘す事が出來ます。

(三)、敎育といふ事は敎師のみの責務ではない　私は兒童敎育といふ事は親と敎師と同等の責務があると考へます、或親によると兒童が學校に入學したらまあ〳〵半日は樂だなどゝ話し合つてる方が時々ありますが私は變に考へます。

敎育といふ車に乘つてゐた兒童は師と親との兩輪

の調和した協力の回轉によつて伸展して行くものであると思ひます。

斯ふ云ふ點から私は學校參觀といふ事が殊に就學始期にはつとめて行ひたいものだと思ひます、勿論懇篤な溫情に滿ちた教師であるから充分の注意は下さいます然し大勢の兒童故時に氣のつかぬ處もありませうそれは決して教師の罪ではありません。

自分の子供の机腰掛の高低を一度見れば素人の親でもよく判りませうそこに注意すれば將來其兒童の脊柱彎曲といふ事は除かれませう。

一度教室を參觀すれば黑板と子供との距離日光の反射の具合なども充分に會得できませう、そこで教師と御談合の上で其兒童の目に適當な適當の座席を定めて戴けばそこに近視眼といふ恐ろしい不具から逃れる事が出來ませう。

(四)、最後に就學猶豫について申上ます　どうしても私達は兒童そのものになるといふ事換言すれば充分に自分の子供の心や身體になつて考へて見ねばなりません事が澤山あります、就中多少身體の弱い者精神發達のおくれてゐる者に對しては猶更の事であります、近隣の他の兒童同樣に無理に就學せしめるといふ事は實に可愛い我子供を死地に陷れる樣な者であります。

兒童の幸福は半年や一年の就學猶豫によつて更によりよく得らるゝ者ならばいと容易な事でありませう。

始終かゝりつけてゐる醫師、通園してゐた幼稚園の受持保姆或は兒童相談所母親相談所に行つて充分に心身發達の診査をしてもらひ且入學の適否を決定してもらへばよいと思ひます。

そして猶豫する方がよいと決定すれば更に幼稚園に半年とか一年とかを通園せしめるといふ事は實にその兒童の將來に取つて大切な事であります。(講演の大要)